

生存科学研究 ニュース

VOL. 9, NO. 1, 1994. 1. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-2518

第2回 基本構想委員会 「脳の発達」を話題として

11月26日(金)午後2時より、国際高等研究所(京都)において、基本構想委員会「高次脳機能」小委員会を中心に、全基本構想委員会委員参加の研究会が開催された。

まず大阪大学医学部バイオメディカルセンター高次神経機能研究所津本忠治教授が「脳の発達」と題して発表を行った。

氏は、脳の発達の研究には、生前の時期のものとも生まれてから後のものとあり、前者は遺伝的指令と関係し、発生学として分子生物学、分子遺伝学等の発達により物質レベルでの研究が進んでいる。自分は主に後者の研究に取り組んでいるが、それは「環境からの影響で変わる」ところであり、子供の能力をいかに発揮させるかということで、教育やトレーニングと大いに関係する、と前置きしてから、脳の発達の可塑性、脳の部分損傷と神経回路の再構築、記憶・学習とシナプスの可塑性等、脳の可塑性について、また素子と回路の冗長性等について説明し、脳がいかに生存環境に適応して発達するかを、幾多の実験的、臨床的事例を紹介しながら具体的に述べた。

その後、認識や意志の問題まで含めて、脳の機能や発達を生存科学の観点から討議し、

また自然科学と哲学の考え方、生存科学研究のあり方等について討議が行われた。

今回は関西での開催を予定していたので、岡本道雄委員のお世話により完成したばかりの国際高等研究所の真新しい会議室を拝借して会議が行われた。出席者は、江橋節郎、藤沢令夫、鈴木英雄、大塚正徳、塚本泰司、青木清の各委員と執行部理事3名。このような委員会を通して研究所の各研究が生存の主題へ収斂されて行くことが期待できる。

平成5年度第2回 医薬問題研究会 薬の有用性について

11月19日(金)午後3時より標記研究会が開催され、東京医科歯科大学佐久間昭教授が「医薬品の有用性について」と題して発表した。

氏は、「有用性」については賛否両論あるが、賛のほうが大勢を占めるように見えると前置きし、その考え方、医療における有用性の意味、それを判断する際の各段階での試験の問題点等を具体的な事例で詳細に説明し、さらに、個人レベルでの患者特性の分類法(価値観尺度)、臨床試験における解析対象の選択、費用・効用の分析における効用の考え方等を論じ、有用性には、個人のレベルでの有用性、臨床研究集団レベルでの有用性、社会的・制度的な有用性と、色々な段階があ

り、それらを混同して議論しては議論がかみ合わず、成果が得られないと指摘した。

第7回 生存秩序と人間関係研究会 象徴的秩序

12月1日(水)午後6時より開催された研究会において、早稲田大学文学部教授小嶋謙四郎委員より標記の発表が行われた。

氏は、当研究会では小田先生が「決定論的カオス」を論じ、清水先生が「関係論」を論じたが、そのなかの関係子の内的状態すなわち心理状態についてもう少し掘り下げる必要があると前置きし、関係子の情報発信、エントレメント(非線形の波動現象の同調)、共振と自己組織化、心理学とシャーマニズムの関係等を説明。

象徴的秩序には、論理的秩序、言語的秩序、神話的秩序がある。脳の中で理解する世界は分節化されており、分節化されていない世界は無限定であり、「空」「無」である。この、言葉により分節化される以前の世界が人間関係の原点ではないか。これを原点に据えて社会システムを考え直したい、と結んだ。なお、研究会は当日で本年度の研究を終了した。

第2・3・4回 「向山委員会」 医療費の構造的分析と 住民と産業の地域医療研究会

11月8日(火)に第2回、12月13日(月)に第3回、12月25日(土)に第4回の向山委員会(医療費の構造的分析研究会を含む大型の委員会)が開催され、標記について討議された。

第2回は、国立公衆衛生院社会保障室長の府川哲夫委員が、厚生省が持っている全統計について、その概要と利用状況を説明した後、その問題点の検討と、このマクロな統計

を補うミクロな観点からの実態の把握の必要性について議論し、地域における実践的研究の重要性が確認され、また向山委員長からアメリカの医療費に関わる多くの資料が提出された。

第3回は、国民健康保険の統計資料を中心に、日本の医療保険全般について、制度と費用に関して検討してその問題点を分析、日本の医療費問題の全体像を把握した。

第4回は、地域保健・医療のあるべき姿における医療費の実態に迫るため、まず「武見思想における医療費」概念を整理し、それを基盤に、今回参加を求めた宗像医師会病院の草場公宏院長を交え、参加者全員で、住民と産業が一緒になって行うべきこれからの地域保健・医療システムのあり方を討議、今後、より具体的な検討を続けることになった。

第10回東西の健康観・医・薬研究会 中国の現実社会と中国医学

11月12日(金)午後1時より松浦業葉(株)社長松浦敬一委員と、昭和薬科大学物理学教授林一氏により報告がなされた。

松浦氏は「日中交流30年から見た生薬」と題し、生薬の取り引きから、さらに広く日中の科学技術の交流に携わってきた経験にもとづいて話された。日中は戦争という時期を持ち、1960年代の中国は基本的に貧しく、その後の動きもこれらの歴史発展の流れに基づいて理解すべきである。日中国交正常化、第一次中華医学会の訪日団と武見太郎との会談への同席、日本漢方生薬製剤協会国際委員会の初代委員長としての活動などを通じて見ると、日中間の交流は大いに盛んとなっている。ただ現在当面する問題として、生薬の品質、供給機構などがあり、さらに、「生き物」としての伝統医薬の研究の方法論がより発展すべきであるとされた。

林氏は、「物理学者の見た中国医学」と題し、現在の中国における「気」をとりまく研

究の状況とその問題点について述べた。中国医学は理論物理学に例えられるものであり、それが理論として体系を成しているかどうかの問題なのであり、その基本概念の一つである「気」を物理化学的に検証しようとする研究のアプローチは誤りである。また実際その研究の多くはインチキに近いものであり、中国の政府要人の指示、これを正そうとする研究者のインセンティブの不足、メディアによる増幅、などによる誤った「気功ブーム」は中国医学そのものを破壊する可能性があるかと警告した。

会員研究会「生死と生存」第8回
植物と動物の不思議なきずな

12月4日(土)、平成5年度第4回(通算第8回)「生死と生存」会員研究会が開催された。

ゲストは、大阪市立自然史博物館主任学芸員の岡本素治氏で、標記テーマで発表を行った。

氏は、植物分類学、生態学を専攻しており、植物と動物の関わりについて、主に花と昆虫の密接な関係について、非常に綿密な観察の様子を示すスライドを使って述べた。

まず、植物と動物の相互に必要な関係において生態系が成立していると指摘し、その例として、花と、その花粉を媒介する昆虫との特殊な関係を取り上げた。具体例としては、「レンゲの花とハナバチ」、「ウマノスズクサの花とハエ」、「イチジクとイチジクコバチ」について述べた。

レンゲの花弁にはハナバチしか蜜を取ることができない構造があり、ハナバチにとっては同じ動作で蜜を取ることができ、レンゲにとっては同じレンゲの花に花粉を持って行ってもらうのに都合がよい。ウマノスズクサは花の中にハエをだまし閉じ込めることによって花粉媒介を可能にしているが、これはハエがハチとは異なる生活様式を持つことをうま

く使っている。イチジクの実の中には雄花と雌花があるが、イチジクバエは誠に絶妙な行動で実の中に侵入し、イチジクの花粉をポケット様の体の構造を使い媒介している。

以上のような誠に自然の不思議と思わずにはいられないような植物と昆虫の関係についての興味深い研究成果を紹介した。

討論では、共生や寄生の関わりと進化との関わりや、生物の目的性の意味づけなどについて活発に議論が行われた。

東北プロジェクト
安家の将来を考える会
および 盛岡研究会

11月12日(金)夜、岩手県岩泉町済生会岩泉病院改築落成祝賀会出席の機会を利用して、安家住民による「安家温故知新の集い」の前夜、安家公民館で住民と研究所の研究会が開催された。

今回は、安家を中心に、安家川、馬淵川、久慈川流域の生活・産業の基本的なあり方とその問題点を、特に国有林のあり方を主題として取り上げて検討。現状については悲観的な意見もあったが、一方、永年の経験によって日本の森林を守ってきた民間人の活動が高く評価され、その後継者ともなるべき人が誇りを持って育つような施策の必要性が議論された。これをうけて、将来を担う若者の本当の意見が聞かれるようにするため、今後、地域内各地区ごとの集いを毎月輪番で開催することが決まった。

11月13日(土)は、盛岡市の予防医学協会会議室において、中尾喜久理事長代行をはじめ、自治医科大学地域医療学教室、県立久慈病院、済生会岩泉病院、岩手県予防医学協会、久慈営林署、農林水産省東北農業試験場等よりの参加者を得て研究会が開催された。

会議では、安家・岩手県を事例とした保健・医療の各種統計データとその処理・利用

法、健康に関わる地域的特性と農林業、森林の機能等、生存の問題に関連して東北プロジェクト全体に関わる基礎的な討議が行われた。

**第4回武見記念賞授賞式
国井長次郎氏受賞**

12月18日(土)午後2時より、研究所会議室において、第4回武見記念賞授賞式が、板垣興一武見記念生存科学研究基金運営委員長、中尾喜久生存科学研究所理事長代行他、多数の運営委員・理事・これまでの受賞者の列席のもとに行われた。

国井氏は、慶應義塾大学文学部仏文科を卒業、戦後合作社の同志と共に寄生虫予防運動、家族計画運動、予防医学運動を推進、全国に展開、民間運動として大きな成果を上げ、さらに、日本の経験を生かし、東南アジアでこれ等運動を総合したインテグレーション運動を、発案、実践推進し、大きな成果を上げられた。現在(財)保健文化会館理事長、(社)日本家族計画協会会長、(財)家族計画国際協力財団理事長等多くの役職にあり、すでに保健文化賞の他、国内・国外の多くの賞を受けているが、健康を基盤とした人口問題への地球規模での人間的取り組みは、生存科学の実践として高く評価される。

当日は、国井氏と受賞対象となった仕事と一緒にしてきた方々も受賞式に参列された。

常務理事会

11月9日(火)午後3時より、常務理事会が開催され、まず、金利の異常な低下による収入減と、会員の増加が予定通りに進まなかったために、財団の財政が逼迫している状況が報告され、関係者全員の会員募集努力が要望された。

次いで、基本構想委員会の開催予定、生存研を理化学研究所や国際高等研究所と肩を並

べて話し合える研究所にしたいという運営姿勢、調査・解析・研究資料の整備、編集委員会の再編、学生等を対象とした準会員制度の新設を含む研究所案内の改定等が協議され、また、ハーバード大学武見プログラムについて、ハーバード大学側からの中止申し入れから3か月が経過して合意書の自動廃棄が発効したことが報告され、さらに「バイオエシックス」の提唱者V. R. Potter教授の生存研顧問依頼の件が了承された。

V. R. Potter教授生存研顧問受諾

前記Potter教授から、生存研顧問依頼を喜んで受諾する旨通知があった。

Van Rensselaer Potter 教授は、生物学者であり、ウイスコンシン・マジソン大学医学部で教鞭をとっている。

氏は、人類の叡智を結集して取り組むべき生存の科学としての「バイオエシックス」を提唱した方で、武見太郎先生も日本医師会会長在職中これを高く評価して会員に広く紹介された。その後、他の研究者たちにより「バイオエシックス」という言葉が、より狭い意味でメディカルエシックスに使用され混乱が生じたため、教授は現在、人類の3000年先のアクセプタブルな生存を考えて、「グローバルエシックス」という言葉を提唱しておられる。過日、卜部常務理事が訪問したさい、武見太郎先生の思想と生存研の活動を紹介したところ、大変強い関心を寄せられ、今回の手紙でも生存研との意見交換を強く希望されている。

研究所日報

11月18日(木)川崎富作先生、川崎病国際シンポジウム開催準備の件につき来所

12月14日(火)常務理事打ち合わせ
